

整する夏作物に重点がおかれ、

カブ（エンバク）春播
一部イタリアン混播

トウモロコシ
ロソク（ソルゴー）
テオシント

の三毛作としている。夏作に三種を併用しているのは、その栽培期間の組合せで、労力と飼料生産の調整をとるのに役立つ。また一部短期牧草の混ぜ播をも採用し（草種はイタリアンライグラス、エンバク、コモンベッチの三種）、労力節約と地力の回復をはかっている。

(3) 草地

草地は下記の五種混播であるが、春また

は秋播種の翌春はライグラスや赤クローバーも良く茂るが、やがてラデノクローバーが他を圧倒する。こうなると、質的には偏り、緊

牧の際、鼓脹症を起こす心配もあるので、

秋期耕転機で浅く耕起し、ライグラスを追播し、ドラム罐で鎮圧することにより春適

度の混播草地とする方法をとっている。

草種 播種量

イタリアンライグラス 一〇〇キ

オーチャード 一・五

ラデノクローバー 〇・三

赤クローバー 一・〇

ペレニアルライグラス 一・〇

現状でも夏枯れのあとは見られず、春の

多収が期待される。牛尿や灌水の効果が現われているものと考えられる。

なお、最も古い草地は昭和三二年造成以

来四年目であるから、いつまで利用できる

かはつきりしないが、四年目の収量は低下

気味なので、一部をイタリアンライグラス

とオーチャードグラスの混ぜ播きに更新し

ている。本人の見透しでは三年利用で四年

目に更新するのが適切であると考えてい

る。

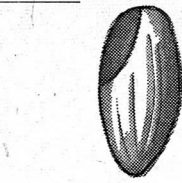
水田裏作の栽培としては極めて常識的普

一〇 本人の獨創性、今後の問題

題点

遍的な技術を採用しており、とくに獨創的なものはない。しかし、作付計画や厩肥の施用、あるいはミズナとナタネの使いわけ、前者は苗代用地に栽培しているなど、家畜と土との有機的な結合と土地の集約利用とからみて周到な計画が樹てられている点に優れている。

畑作は全面的に飼料化されており、厩肥の多用（一〇ア当たり一作三、七五〇キダツ、年間平均九、四〇〇キ程度を施用）で高位生産をあげており、さらに開墾地における草地造成の成功と牛尿散布による維持管理技術の確立は、この経営において最も推賞すべきものであると考えられる。



ある日の米と草との対談

(その一)

十田垣住雄



時代は変わった

米 瑞穂の国、石高知行、米相場、白米食、清酒、鮭と王座を占め、お芽出度いと

きには餅、赤飯とちやうあいされるままに、千何百年の間水田の中で可愛がられてきた

お蔭で、今では同胞が年々七、〇〇〇〜八、〇〇〇万石も生まれ、米の飯では皆さんに

迷惑をかけないようになったのに、どうしたことが近頃では、全く歯牙にもかけな

った草などと身分争いするような破目になった。除草除草と邪魔扱いしたものど較べられては、僕達の永い伝統と功績とを忘却した名誉きその行為である。

草 あなたのこととは全くごもつとも

な話で一言もいふことはない。米食の人達が米産を尊重し敬愛して、つめたい水田の

中の仕事さえがまんし、造田の出来の限り

山間にまで米作を拡げて、糧食をつくった

ことは並々なことではない。米へんに量と

書いて糧（かて）というからこそ、糧食では王者の位置を持ったし、恐らく今後でも王者の位置を保つだろうから、その点ではそんなに名誉をききされることはあるまい。

米 そんならなせ近頃になってから、農

政転換だとか、草産振興、畜産拡張などと

いって、とるにも足りない草ごときものを

だいにしだしたのだ。草 これには深い仔細があるが、あなた

は生いたちから見ると雑草しか知らないもので、牧草の話をしてもすぐわからないであろうから、まずわかり易い話をする、栄養の養うという字は、羊の下に食と書いてあるのを考えて見たなら、糧は米の量だが栄養は羊を食うことだと思われるだろう。ここが米食だけではどうも栄養が完全にとれない、米だけではうまくゆかないと考えられるようになって、羊をはじめ牛など草を飼とする草食家畜をふやすため、草が必要な立場を持ってきたわけである。だから米の王座を占領するものではなくて、食生活改善向上するために、米作りのほか草作りを進めようとするに過ぎないのだ。

米 意外なことを聞くものだ、今まで米の飯を喰えば、お菜にいづらかの魚貝や卵でも添えれば、うまい食事で栄養も満点だと思っていた。勿論米の成分には蛋白質が

足りないくらいは知っていたので、兄弟分の豆作で豆腐、味噌、醤油など毎日用いていたのだから、それで今日まで立派にやってきたのではないか。梅干の握り飯でさえ相当活動したのではないか。養うことが羊を食うことであっても、ジンギスカン料理なんか喰わなくても差支ないのではないか。

草 根強い王者だけにあなたのいうことは真理がこもっている。しかしもっと古代のことを考えると、山彦、海彦の時代には、山では草の実や、木の実や、鳥獣などを、海では魚貝や海藻を採って暮らしていたのだから、草の実や木の实や、魚貝や海藻だけが食糧でなく、鳥や獣など大いに食っていたに相違ない。それがいつの間にかあまりけだものを用いなくなつて、穀食的な植物食の生産だけが発達したため、けだものを養うための飼(かひ)の生産が全く進まず、糧といえど直接糧にする作物をつくることだけ進んで、飼の方は天恵の天然生産にまかされたので、飼草をつくるような考えが全くなかった。飼という字は食を司ると書くのだから、これも食料生産を司るためには重要なものであったが、これを軽視したことから食を司ることに大きな欠陥が起こつてきた。

草 全くその通りだ、もっと関係のあるのは、着物のことである。東洋では早くから植物せんいをつくむことがはじまって、木綿や絹が進んだので、けだものの皮はあまり用いなかった。これに反して西洋では山羊や羊の毛皮や毛を重用したので、衣服原料としてもけだものの飼育が重視せられたから、飼草の栽培技術が衣食を生産するために進んだ。

こんな関係で瑞穂農業では桑の栽培が進んで桑園が発展したが、西洋では牧草の栽培が進んで草園が発達した。しかし今では桑園は斜陽になつて、草園がクローズアップしてきた。

米 そういえば札幌駅の隣りに桑園駅があるが、今では桑園が目につかず草園が目につくので、へんだとは思つていた。いろいろ話を聞いてみると、瑞穂式の住宅で衣服を着ている人が減つて、洋式住宅で洋服を着ている人がふえたところを見ると、食事の方も和食から洋食にだんだん変わつていけるらしいので、僕達の仲間がいばつていた時代とは、相当に違つてきたとは感じていたが、その相手が草だとは全く気がつかなくなつた。またそれほど草が重要なものだととは中々考えられない。草は俺達の敵だと思つていたから、どうしても俺達の仲間になつて親しくやれる味方だとはまだ考えられない。まして飼草作りが食の司になるなにかとは、夢にも思われぬ。

飼草作りは食の司か

草 あなたの経験や知識では、あなたこ

そ食の司だと思つているのだから、瑞穂思想では飼料が司だなどと考えられないのは当然だ。これは米作のような水田作をやらないところで、糧として麦作、芋作などをやつている畑作思想から起こつたのだから、あなたにはよくわからぬわけだ。畑作では平坦面でも水田と違つて傾斜面でもやるので、傾斜地では肥効分を流さぬようにするため、草作農業が重要な役割を持つてゐる。だから飼草作が糧食作の生産に重視せられ、飼草栽培技術が向上し草作が進歩するほど、営農基盤の造成、土地能力の増進、生産性の向上などが発達して、農畜の経営が発展した。このような発展振りから見ると、飼を作る農業である草作が、食を司つてゐると見られるわけだ。

米 だからといって畑作ではとても水田作ほどの成果があがつてゐないではないか、たんぼ作りがやはり畑作りよりよい。

草 たしかにそう考えられるが、それは瑞穂式農業としての狭い見方であつて、もっと広汎に世界農業を見渡すと、米作りを主軸にして水田農業をやつてゐるところよりも、草作りを取り入れた畑作農業をやつてゐるところの方が、経済文化程度が進んでいる。米作り主軸では造田が人口増殖に伴つたため、子孫がふえ分家するにつれて、だんだん田分け(たわけ)の傾向があるが、草作りを取り入れた畑作では造畑が不稔作の寒冷傾斜地にまで伸びて、人口増殖につれ土地経営が進むので、国土の大部分を開発することができ、我国では僅か国土の二〇%しか開発してゐないが、欧州各国で

は我国よりも条件の悪いところで、六〇〜八〇%以上を開発してゐる。

米 なるほど国土の経営率が低くて、農家規模が小さくなつたが、そのため反収量を増進して多収穫で糧を支えてきたことは、水田がはるかに優れてゐるのではないか、だから誰でも水田をつぶして転換するような気持ちが起こらないし、それではやつてゆけなくなつてゐる。

草 多雨、多湿な水の多いところで、水田作はたしかに多収生産性の特色を發揮してゐる。だから水性栽培として大いに重要性を持つてゐるが、排水可能な地域では水田作が必ずしも多収性ナンバーワンではない。土地条件の良いところを水田にして、それより悪いところを畑にしてゐるから、畑作不振の傾向が生ずるが、水田と差のないような良条件の畑なら、多毛作栽培で水田以上の反収額をあげてゐるところがある。

米 麦連作というふうな農業では、多肥農法で支えられてゐるから、肥料代がかさんで純益が減じ、不作のときには肥料代その他の入費さえ支払い難いことが起る。そこで肥料も十分にやれないため地方が衰えることもあるが、たとえ多量の化学肥料をやつても、土壌の化学的変化で地力が衰えて、生産性が保持できないことが起る。そこで輪作農法が工夫せられてきたのであるが、この農法では水田よりも畑の方がやり易いので、畑作主体の国々では、この輪作に牧草を栽培して、牧草の土壌改善作用を活用し、生産性を高める手段が進んだ。こ

れが飼草の食を司る由来であって、この牧草輪作農法が食糧生産の維持向上を司るようになってきた。

米 畑のことはわかったが、水田では輪作なんかより、裏作でレンゲその他を作った方が良いのではないか。

草 たしかにレンゲ作りは良い手段である。この裏作レンゲの短期作でさえ効果があつたから、もっと草作期間を伸ばして牧草の根系作用が十分に發揮されるようにすると、草産効果だけでなく草根効果が土壤改善に大きな潜在効果をあげる。これは草作期間だけ米作をしないことになるから、着手のはじめには米産が減るが、牧草の跡地効果で数割の米産効果が現われるから、土壤生産性が向上するにつれて米産も進んでくる。だから水田の老朽化を防止で、米産を安全に進めようようになる。

米 米作や麦作を減じてまで、田畑に牧草を作るよりも、牧草なんか原野の草地に作つた方が良いのではないか。

草 ごもつともな考え方である。野草地の改良こそ重要なことであつて、ぜひやらなければならぬ。また、やればやれることであるから、草地農業といって草地経営の手段が進んできた。

ところが草地改良の方にも、あまり気乗りがしないのは、田畑に較べて土地が悪いからであつて、思うように草産効果が伸びないところに難点がある。

良い土地を田畑にして悪い土地で草を作るといふ観念は、あたり前の考え方のようであるが、この考え方にはまだ飼草が食を

司るといふ観念がなく、糧として米麦を作る方に重点を置いていた。だから田畑を酷使して糧産にはげむが、草地をそれほど重視しないから草産、畜産が伸びず、有機農法が進まず、田畑も草地も瘠せてくる傾向がある。

これに反して飼草を重視する営農では、先ず良い土地に牧草を作つて、草産、畜産の自然力を最大にして、糧産地はこれよりも劣つた日当たりのよい土地で作る。こうすると年々耕作するところには、はじめから豊富な有機自給肥料を与え得るので、年を経るにつれて地力が向上し、糧産が畜産にひきずられて伸展するようになる。従つて糧産地がだんだん拡張してくる。

開拓のはじめには自給力を十分に發揮して、購買をつとめて少なくしなければ、やつてゆけないのだから、自給飼料、自給肥料の増産を図ることが、経営の確立経済の安定であるから、いままでのように田畑重視ではじめるよりも飼草重視ではじめた方がよく、土地もそれに順応して活用し、年を経るにつれて地力を増し生産性を向上するように推進し、富の蓄積を図つてゆとりができてから投資力を發揮し、富源の拡充を期するのが順当なやり方である。

米 米麦を作れば藁や稈がとれるので、それに野草や副産物を混用すれば、自給飼料も自給肥料もできるわけではないか。

草 鶏や豚やまた役畜、肉畜などを飼う場合には、それでもあるていど發展する。しかし草食家畜は草が主食で、能率の高い家畜は牧草食という能率の高い草で出来上

がったものであるから、藁稈や副産物だけではうまくゆかない。稈作で養分を実に移してしまつた藁稈と、発育中の養分を十分に含んでいる牧草とは全く質が違つたので、飼料という点では大差がある。家畜の発育に必要な成分や乳肉卵の生産に必要な成分は、藁稈にはないが、若草や牧草には含んでいる。また糧穀や副産物には成分度の高いものがあるが、その成分には偏りがあつて、良草のように平均した成分を含んでいない。

糧や藁稈は毎年耕作して刈取つて用いるが、草作では一度栽培すれば多年継続し、放牧すれば家畜自ら収穫して乳肉を生産するので、コンバイン以上の有利な活動をすれば、だから作物を作るよりも飼料を作つた方が、自給稼働が進むので、労働力の少ない開拓の初期には好都合である。

藁稈は飼料というよりも敷料と見るべきものであつて、敷料にすると一部が採食せられて飼料になり、全部が既肥として肥料になる。藁稈のような窒素分の乏しいものは、そのままでは肥料に向かぬが、厩肥、堆肥にして腐熟させるとはじめて良い自給肥料になるのである。

こんな関係で藁稈の循環では、飼料及び肥料としての効果が乏しいが、これに牧草の循環が加入すると、自給飼料及び自給肥料としての効果が著しく増大し、生産性の向上から経済の成長が起こってくる。

米 米さえ作つていけばよいと考へていたが、二重価格制や貿易の自由化などで、誇りを失い、また案外経済が伸びないので

困つていたが、いろいろ対談してみると、やはり作付転換や草地改良をやらぬと、今後はやつてゆけないような気持ちになつてきた。いったいどこからどうやつてはじめてたらよいか。

まず草作りの効能は

草 どこからやるかということ、情況や条件で違つてくるが、先ず自分だけでやることからはじめた方がよい。作付転換などは思い切ればやれるし、庭先や自分の田畑周辺くらいの草地なら自力で改良できる。

乳牛でも飼うのなら規模に応じて計画を立て、先ず手近の田畑の一部に牧草を作つて、夏季は放牧用にして、その後で採草するのが良い。そして飼料に応じて頭数をふやし、自給力で手数のかからぬようにやるのが得策である。

庭先や田畑周辺に雑草を繁茂させていることは、草取作業を忙しくする原因だから、雑草の根や種子を絶やすように、まず牧草に切り換えた方がよい。

牧草は一度播くとそれが永くはびこるので、最初からよい種子を選んで播くことが大切である。少しくらい高値でもその方が経済的である。また、放牧地の仕立方と採草地の仕立方には違つたコツがあるから、この技術を会得し、零細な雑草地の改良にもいろいろ簡便な技術があるから、これを呑み込んでからやつたがよい。

米 米作りと草作りとは技術が違つてい

さしいだろう。

草 どっこい、そうはゆかない。あぜの中で毎年繰返すような米作りでは、あまり計画性がないが、草作りではいろいろなところで、いろいろな作り方があるし、家畜との関連があるので、その計画にはむずかしさがある。永年作であるから、一度しじくと影響が大きいし、追肥とか追播とか草利用法とか複雑な問題が重なるので、頭の働がよくなないと成功しない。この点から見て草作りの方が一歩も二歩も進んだ営農組織になるので、こんな転向が農業の文化経済を向上してくる。

お年寄りは古い思想を守護することに大きな役割を持っているが、この新しい思想についても青年に負けないような進取の気概を出してもらいたい。

米 米作りの収益から見て、草作りの収益が落ちるのではないか。苦心して効果が無いようでは進められない。

草 ちょっと考えるとそういう見方になるが、米産反収一〇俵くらいの田地で、牧草作りをすると反収一〇二〇くらいになるので、これを乳産八〜一六石に換えると決して遜色ない。また米産反収四〜六俵くらいなら、牧草四〜八石、乳産三〜六石になって遜色なく、こんな寒冷地域の米産はこれで最大限であろうが、草産ならまだ伸びるのである。その上、草産では全体の土地生産性が向上するので、農業成果があがり、とくに寒冷地でその特色を発揮する。

米 米産は政府の裏付で安定しているが、草産、畜産の方は生産過剰になると引

合わぬようなことが起こらぬか。

草 政府の価格政策はどう進むかよくわからぬが、米の二重価格制がいつまでも続くとは予想できない。米産は重要な農政だから適切な政策が進むであろうが、自由貿易の現代経済相では、米産は維持されても増産奨励はいままでのように行なわれないうであろう。これに反して畜産食はますます需要を増している、その見透しは明かるい。

現に乳肉需給関係でいろいろな問題が起こっているのは、自給力生産のものでなく、飼料を購買に依存し、家畜まで購入して、たんに畜産物だけつくっている経営体から発生している問題が多く、飼料代を下げよ、乳肉代を上げよと叫んでいるが、これは経済方則に合わぬ不合理な生産形態から起こっているのである。経済方則ではよいものをつくって安く売ることには眼目があるので、こんな過渡期的な現象は気にしない方がいい。

米 気にしないとしても、実際問題で起こっているから、気になるのだが、果たして気にしないでもよいという見透しがあるのか。

草 草産が進んで草地酪農が安定するにつれて、うまい、よい乳が安く生産せられ、また草地改良が進むほどうまい、よい肉が安く生産されるようになるから、これが出回るようになれば、都市付近の購買依存式経営の不良な高い乳肉生産が行き詰っている。

国際経済の貿易自由化でも、農産物、畜産物共に自由化に踏み切るには、生産性水

準を世界水準にあげればならぬが、その水準は草地農業の欠陥をうけて先進国並みの農業に転進することであるから、市乳酪農のような高価生産では太刀打ちできない。また国際分業の時代が迫っているから、そうなるとう濠州、ニュージーランドなど草地酪農地帯の乳肉との競争に對し、力づけておかなければならない。

国際分業が進むと日本は工業先進国として工産物を輸出し、輸出先の農業国から米を輸入する必要があるが、安い米の輸入がふえる傾向があるので、米産はこの点から見ても伸び悩む見透しであるが、新鮮食糧である園芸作物の果樹、蔬菜や畜産物の乳肉卵などの生産は、経済文化の進むにつれて伸びる趨勢を持っているから、生産性を向上し経済方則通りに生産が進むほど見透しは明かるい。

新鮮食の生産が伸びる

米 園芸作物や新鮮乳肉などは、都市付近なら良いが、田舎の偏僻なところではうまくゆかぬのではないか。

草 たしかにそうであるが、スピード時代に入って交通路や交通機関の整備がだんだん進むので、距離観念が変わって田舎と都会との交流が容易になるし、また新鮮味を失わぬような輸送処理法もだんだん進むので、偏僻なところでも特産出荷として進歩してくる。

これをはっきり認識してもらうために、最近の市乳について見ると、従来の殺菌牛乳即ちパスチユライドミルクが減って、

滅菌牛乳即ちステリライズドミルクが増している。

市乳処理法の変遷

滅菌牛乳	殺菌牛乳
英国殺菌処理法	H T S T 処理法
ウルトラH T S T 法 (ダブル処理法)	パスチリゼーション
一三五度(華氏二七五度)二秒加熱 密封した後再度一〇七度(華氏二二五度)追加滅菌、永久保存	六三度加熱三〇分保持スタンダード的な処理法
共滅菌、保存力大	七一七度(華氏一七一度)一五秒加熱

新鮮味をつとめて保全し、しかも冷蔵を必要としない保存力の強い処理法が進んできたから、市乳販売上の技術的、経済的な困難な諸問題を解決し、安価な市乳の普及が偏僻なところまで伸びる傾向が起こる。偏僻なところほど乳肉産が経済的に、しかも草産に恵まれてよいうまい乳が安く生産できるのだから、この点で優位な立場を持つてくるのが予想できる。その上乳肉加工製品にしても、偏僻なところほど雑菌が少なく良品ができるので、市乳、乳製品共に有利な条件で進むものと考えうる。

米 米と草なんか問題にならないと思っていたが、それでも毎年、毎年草取りをして少しも減らずに、ほっておくと米よりも良く生えることには内心驚いていた。そして、どんなところにも生え伸びる力の強さを感じていた。またよい草の生えている土地には腐植が多く、土壌も肥えてい

ることぐらいいは感づいていた。このようなことを感知しながら、その草作りのことは少しも考えてみずに、ただ米さえ作れば良いと思ひ込んでいたのは全くはずかしい。

ことは卯年で兎の年であるが、兎が早く飛べる自信で亀との競走で居眠りしている間に、亀が鈍足で休まずに山に到着してしまつたように、米は直ぐ糧になるので草のような直ぐ糧にならないものとは勝負にならぬと思つて安心してしたが、糧よりも飼になる草の方が、鈍くて遠回りのようであるが、山を登りつめるには、たしかに優れた特色を持つてゐることに気が付いた。

兎と亀との競走を思い出して、油断せぬように米作りも新しい道を拓いて、草作りも加えて仲好くやつてゆかなければなるまい。

草 米さんがそう考えてくれれば、畑作の皆さんが一層そう考えてくれるであらう。また果樹、桑園、樹林などでも草作りの効用を感じて、力を合せて野山作りが進んでくるでしょう。そうすると荒地のような野山や河岸や海岸なども拓けてくるに相違ない。

わが国では糧穀祭（コルニボラウス）が昔からの伝統で、新嘗祭、神嘗祭が行なわれたが、今日では勤労感謝祭に変わった。西洋では謝肉祭（カルニバル）が昔から行なわれていたように、古くからの農魂の精神的伝統があるとしても、現在では世界が狭くなって経済関係が密接になってきたので、農魂にもカルニバル精神が必要になつた。また経済文化の進むにつれて菜食民族（ベ

ジタリアン）の穀食（コルニボラウス）から肉食（カルニボラウス）の食生活改善が必要なので、糧穀生産農業に畜産農業を導入することが、止むに止まれぬ農業転換政策になつてきた経済文化の大勢である。草作転換、草地改良などは、兎のように飛躍して進めないが、亀のように鈍足ながらたゆまずに一步一步進めば、必ず成功することが出来る。

米さんが卯年を迎えるにあつて、兎と亀との童話を思い出されたことは、たいへん愉快な思ひつきである。どうぞご油断なく米作りの方も努力しながら、草作りの方に新しい努力の道を拓いて、お互いに助け合いながら仲良く協力して進んでもらいたい。どちらが勝つという勝負ではなくて、どちらも併進することが農業構造を整え生産性を向上進歩し、国内的にも国際的にもふさわしい姿になるのだから、農業近代化の軌道に乗り遅れぬように国策に順応しやつてもらいたい。

せつかく国策的な基本法が出来ても、実践する皆さんがその気にならなければ、決して進むものではないから、皆さんがよく理解されて自覚推進に踏み切らない限り、農業の諸問題を解決して近代化することはできない。

米 農業問題の方はだいたい理解したので農業の進め方はわかつてきたが、農村の土地と人口との問題を考えると、細分化した現状をどう打開して、工業との経済格差を縮め得るかどうかには、まだまだ信頼が湧かない。

草 ごもつともな不信である。農業問題というよりも農村問題という点になると、まだ大きな課題が残っている。そして農業問題の解決の鍵を農村問題が握つていてもいえるから、この課題に入ると余り長時間にわたるので、今日はこれくらいにして後日改めて農村問題について対談することに致しましょう。（以下次号）

酪農経営を有利にするには、飼料構成を大きく変えて、自給飼料の生産を大幅に増加しなければならぬが、それには、土地利用上、他の作物との競合が問題になる。したがって飼料作物の収益性は、競合作物の収益性よりも高いことが必要である。

いうまでもなく飼料作物は、それを家畜に給与して、はじめて経済的有用性を發揮する。いわゆる中間生産物であるので、一般的には市価がなく、直接的にその経済価値を判定することができない。そこで、その評価にはいろいろな方法が用いられるがその一つに『利用価値評価表』

というのがある。これは、牛乳生産の収益の中

飼料作物の経済性 利用価値から収益性をみる

から、当然自給飼料へかえすべき部分を識別して利用価値を算出し、その経済価値を評価するやり方である。別表はこの方法で、おもな自給飼料作物一基当たりの利用価値を算出し、それぞれの経済価値を示したものである。

こうした数を一応値の尺度にすれば、自給飼料作物それぞれの経済価値の判定もつくし、また、飼料作物と他の作物との比較有利性のめやすもつくだろう。

作物名	1基利用価値	当り円
青刈りトウモロコシ	2.00	3.50
刈草	3.38	5.50
クタクタ	3.50	6.05
クタクタ	5.50	3.17
クタクタ	6.05	3.53
クタクタ	3.17	4.95
クタクタ	3.53	4.45
クタクタ	4.95	3.10
クタクタ	4.45	5.40
飼料作物	イマ	2.15
	ネ	
	科	
	科	
	科	
	科	
牧草	イマ	3.44
	ネ	5.07
	科	4.61
	科	
	科	
	科	

農作新生活標語 (6)

作物も子供と
おなじ気持ちで
ほめて可愛がれば
よく育つ

たえば、水田利用の場合における水稲との経済価値比較となると、これに代えるためには、よほどの増収を期待しておかないといけない。ところが、これが麦となると、こうした条件がずっと緩和されてくる。

一方、畑作の場合だと、畑作物はおしなべてその経済性が低いので、これに対抗する飼料作物の生産量は水田の場合ほど高くなるともよいことになり、それだけに飼料作物がはいりやすいといえる。自給飼料作物の経済評価のやり方にはいろいろあるようだが、ここに示した『利用価値』を利用して、その収益性をみきわめるのも一方法である。活用を期待したい。（全酪新報より）